バキチの仕事

宮沢賢治

「ああそうですか、バキチをご存じなんですか。」

「知ってますとも、知ってますよ。」

「バキチをご存じなんですか。

小学校でご一緒ですか、中学校でご一緒ですか。いいやあいつは中学校なんど入りやしない。やっぱり小学校ですか。」「兵隊で一緒です。」

「ああ兵隊で、そうですか、あいつも一等卒でさね、どうやってるかご存じですか。」「さあ知りません。隊で分れたきりですから。」

「ああ、そうですか、そいじゃ私のほうがやっぱり詳しく知ってます。この間まで馬喰をやってましたがね。

今ごろは何をしているか全く困ったもんですよ。」

「どうして馬喰をやめたでしょう。」

「だめでさあ、わっしもずいぶん目をかけました。でもどうしてもだめなんです。あいつは隊をさがってからもとの大工にならないで巡査を志願したのです。」

「そして巡査をやったんですか。」

「それぁやりました。けれども間もなくやめたんです。」

「どうしてやめたんだろうなあ、何でも隊に来る前は、大工でとにかく暮していたと云うんですが。」

「それやうそでさあ大工もほんのちょっとです。土方

をやめてなったんです。その土方もまたちょっとです。それから前は知りません。土方ばかりじゃありません、飴屋(あめや)もやったて云(い)いますよ。」

「巡査をどうしてやめたんです。」「あんな巡査じゃやだめでさあ、あのお神明(しんめい)さんの池ね、あすこに鯉(こい)が居(い)るでしょう、県の規則(きそく)で誰(だれ)にもとらせないんです。ところが、やっぱり夜のうちに、こっそり行くものがあるんです。それぁきっとよく捕(と)れるんでしょう。バキチはそれをきいたのです。毎晩(まいばん)お神明さんの、杉(すぎ)のうしろにかくれていて、来るやつを見ていたそうです、そしていよいよ網(あみ)を入れて鯉が十疋(ぴき)もとれたとき、誰

だっこらって出るんでしょう、魚も網も置いたまま一目散に逃げるでしょうバキチは笑ってそいつを持って警察の小使室へ帰るんです。」「変だねえ、なるほどねえ。」「何でも五回か六回かそんなことがあったそうです。そしたらある日署長のとこへ差出人の名の書いてない変な手紙が行ったんです。署長が見たら今のことでしょう、けれども署長は笑ってました。なぜって巡査なんてものは実際月給も僅かですしね、くらしに困るものなんです。」「なるほどねえ、そりゃそうだねえ。」

「ところがねえ、次が大へんなんですよ、耕牧舎の

飼牛(かいうし)がね、結核(けっかく)にかかっていたんですがある日とうとう死(し)んだんです。ところが病気(びょうき)のけだものは死んだら棄(す)てなくちゃいけないでしょう。けれども何せ売れば二、三百にはなるんです。誰(だれ)だって惜(お)しいとは思います。耕牧舎でもこっそりそれを売っているらしいというんです。行って見て来いってうわけでバキチが剣(けん)をがちゃつかせ、耕牧舎へやって来たでしょう。耕牧舎でもじっさい困(こま)ってしまったのです。バキチが入って行きましたらいきなり一疋(ぴき)の牛を叩(たた)いてあばれさせました。牛もびっくりしましたね、いきなり外に飛(と)び出してバキチに突(つ)いてかかったんです。

バキチはすっかりまごついて一目散に警察へ遁げて帰ったんです。そして署長のところへ行って耕牧舎では牛の皮だけはいで肉と骨はたしかに土に埋めていましたって報告したんです。ところがそれが知れたでしょう。

町のものもみんな笑いました。署長もすっかり怒ってしまいある朝役所へ出るとすぐいきなりバキチを呼び出して斯う申し渡したと云います。バキチ、きさまもだめなやつだ、よくよくだめなやつなんだ。もう少し見所があると思ったのに牛につっかかれたくらいで職務も忘れて遁げるなんてもう今日限り免官だ。すぐ

服をぬげ。と来たでしょう。バキチのほうでももう大抵巡査があきていたんです。へえ、そうですか、やめましょう。永々お世話になりましたって斯う云うんです。そしてすぐ服をぬいだはいいんですが実はみじめなもんでした。着物もシャツとずぼんだけ、もちろん財布もありません。小使室から出されては寝む家さえないんです。その昼間のうちはシャツとズボン下だけで頭をかかえて一日小使室に居ましたが夜になってからとうとう警部補にたたき出されてしまいました。バキチはすっかり悄気切ってぶらぶら町を歩きまわってとうとう夜中の十二時にタスケの厩にもぐり込ん

だって云うんです。

　馬もびっくりしましたぁね、（おいどいつだい、何の用だい。）おどおどしながらはね起きて身構えをして斯うバキチに訊いたってんです。

（誰でもないよ、バキチだよ、もと巡査だよ、知らんかい。）バキチが横木の下の所で腹這いのまま云いました。（さあ、知らないよ、バキチだなんて。おれは一向知らないよ。）と馬が云いました。」「馬がそう云ったんですか。」「馬がそう云ったそうですよ。わっしゃ馬から聞きやした。（おい、情けないこと云うじゃないか、おいらはひどく餓えてんだ。ちっとオートでも

振(ふ)る舞(ま)えよ。）ところがタスケの馬も馬でさあ、面白(おもしろ)がってオペラのようにふしをつけて（なかなかやれないわたしのオート。）だなんてやったもんです。バキチもそこはのんきです。やっぱりふしをつけながら、（お呉(く)れよ、お呉れよ、お前のオートわたしにお呉れよ。）とうなっていました。そこへ丁度(ちょうど)わたしが通りかかりました。おい、おい、バキチ、あんまりみっともないざまはよせよ。一体馬を盗(ぬす)もうってのか。

それとも宿(やど)がなくなって今夜一晩(ひとばん)とめてもらいたいと云(い)うのか。バキチが頭を掻(か)きやした。いやどっちもだ、けれども馬を盗むよりとまるよりまず第一(だいいち)に、お

れは何かが食いたいんだ。（以下原稿空白）

底本：「ポラーノの広場」角川文庫、角川書店
　　1996（平成8）年6月25日初版発行
底本の親本：「新校本　宮澤賢治全集」筑摩書房
　　1995（平成7）年5月
入力：ゆうき
校正：noriko saito
2009年8月23日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。